

商工經濟研究

第十三卷 第二號

(昭和十三年
五月十五日發行)

大戦前に於けるフランスの國民貯蓄及び投資 (一)

小川 福太郎

我國に於ては戦時財政經濟の進行に伴ひ、莫大なる赤字公債の發行が豫定せられ、此の國債消化の必要と一方には生産力擴充の必要とに依つて、國民貯蓄の増大が痛感せられ、政府は大藏省に貯蓄獎勵局を設けて年八十億圓を目標として貯蓄の奨励に乗出すことになつた。此時に當り、貯蓄國と稱せられるフランスの國民貯蓄を繞る諸問題、就中近年に於ける其の財政經濟の難局と國民貯蓄との關係を顧みることが、他山の石となすべきものがあらうと思はれる。只だ本稿は近年の問題に入る迄の序説として調べたる世界大戦前の状態に過ぎないのであるが、都合に依つて此處に載せることとしたものである。

一 フランス人の貯蓄心

周知の如くフランス人は一般に貯蓄心に富み、農民は昔から毛絲の靴下 (Bas de laine) を財布の代りとして

大戦前に於けるフランスの國民貯蓄及び投資

之れに金銭を入れてゐると言はれてゐる。而してこのフランス人の貯蓄心に就いて裏書するものは、一九〇八年九月十九日ドイツ帝國議會に於いて時の宰相フォン・ビュローが述べた次の言葉で、之れはフランスの貯蓄に就いて論ずる學者の屢々引用するものである。⁽¹⁾「余はフランス及びフランス人を知つてゐる。余はフランスに於て多年を過した。フランスの富は、其の土地の豊饒次いで國家及び住民の活動に基くものであるが、然し尙賞讃するに足る其の節約に負ふところが多い。フランスの男女の各々が特徴とする此の貯蓄心に依つて、フランスは世界の銀行家と成つたのである。フランスは生産に依つて得るところは我々よりも少いが、貯蓄に依つてそれを補ふのである。」此の言葉は簡潔にフランスの長所及びフランス人の貯蓄心を叙述してゐるが、フランスの中産階級或は小ブルジョアと呼ばれる階級が、大戦前に於て生活の安定を目的として如何に貯蓄をするに熱心であつたかは、次のロリオの一文に依つて知ることが出来る。⁽²⁾

「一九一四年以前に成人期に達した者、特に田舎の小都會或は都役所の所在地に住んで居つた者であれば何人も、其の記憶に訴へて、當時の中小の金利生活者^{ラシチエ}が如何なる状態にあつたかを容易に思ひ出すのである。商賣から引退した商人、退職した官公吏、裁判所の舊吏員、僅かな資産を持つ寡婦や未婚の老女達は、節約して蓄へ或は遺産として受けた小資本より得る所得で生活して居つたのである。在職の官公吏は僅かの俸給しか受けてゐないので、恥しくない地位を保ち獨立性を維持するためには、自身の資産を持つてゐる必要があつた。幾代にも亘る貯蓄に依つて作られた財産の如何なるものであるかを知らないドイツ人やアメリカ人は、我々を輕蔑して「金利生活者國民」と言つた。フランスでは、誰もが、最早働かなくてはなよいと考へられる収入を生出すに足る資本を持つ迄、貯蓄をした。貨幣は安定して居り、又人々は貨幣が不安定のものとな

るとの疑ひさへも持たなかつたから、豫算を立て、自分の望む様な生活をするには、幾千の収入を持つべきかを知ることが出来た。そして其の金額に達すると、働くことを止めて隠退し、家を買ふか或は新築させることが出来なければ、故郷へ歸つて家族の家に居住したのである。斯かる欲望の制限と、豫想外の事が無ければ欲望を満足させ得る可能性とに依つて、多くの人々は有利なる結婚後、青年時代より金利で生活し、又兵役を終へて歸つて後無職で居ることが出来たのである。……貯蓄の嗜好或は其の熱愛は小ブルジョアの特性となつた。子供達が一人前になるに就いて援助をした後、手を觸れずに彼等に遣さうと望む資本を殖やすために、自分の出費を節減するといふことも屢々あつた。勿論斯かる氣風は、若い企業心に富む諸國の競争と戦はねばならぬフランスに取つては、經濟上の一つの弱點であつたかも知れぬ。然し此の氣風は金融上の大なる力であつた。即ち我國の經濟的設備、鐵道網の建設、戦前二十年間に發生したる大工業の發達、炭鑛の整備、殖民地の開發に必要な資本を提供し、又我國の國際收支の受取勘定超過に依つて外國に對して借款を興へることを可能ならしめたものは、此の貯蓄であつた。」

二 貯蓄力の原因

レスキユールは、フランス人が特に貯蓄心に富むことに就いて否定はしないが、フランスの貯蓄力に就いては他の深い原因が存するとなし、其の主要なるものとして(一)出生率の少きこと、(二)財産の分割、(三)農業の盛んなること及び農業恐慌の終熄、(四)以前より蓄積せられたる富を擧げてゐる。然し此の四つの主要原因に就いては、彼れは輕重の差を付けてゐるので、フランスの貯蓄力の最も重要な原因を何れに置いてゐるかを知るために、彼れの述べてゐるものを要約補足して次に記することとする。

第一に出生率の少いことは貯蓄をするに都合よき一要素ではあるが、彼れは之れを過重視してはならぬと述べてゐる。即ち子供が少ければそれだけ多くの貯蓄が出来る様であるが、一面には子供の多い父は獨身者や一人二人の子供を持つ父よりも多く働き生活を質素にして後者に劣らぬ貯蓄をすることがある。又子供が一人であると之れを大切に育て費用を多く掛けるといふこともある。人間の生産には商品の生産と同じ様な點があつて、生産費が生産の増加に伴つて減少する。尙又今日の子供は明日の生産者と成り貯蓄者と成るから、成年人口の多いことが貯蓄力の重要な要素と成る。それ故にフランスの出産率の少いこと又従つて人口の少いことを、其の貯蓄力の説明として過重視してはならぬと言ふ。

第二に財産の分割に就いては、フランスは分割相續制度を採つてゐるので、之れが中産階級を多數ならしめる一原因となるのであるが、レスキニールは中産階級の貯蓄力は確かに富有階級の貯蓄力よりも大であり、且又フオン・ビユーローが述べた貯蓄心の最も發達してゐるのは確かに中産階級であると思はれると言ふ。之れに就いて彼れは、精確なる統計を擧げることが出来ないが、例へば貳萬法の収入を小都市或は田舎に住む四家族に各五千法宛分割した場合には、貳萬法の収入が大都市に住む一家族に屬してゐる場合よりも、多くの貯蓄を生ずることとは確かであると述べてゐる。然し彼れはフランスの貯蓄力の原因として此の財産の分割をば、先の出生率の少きこと以上に過重視してはならぬと言ふ。

第三にフランスの農業の盛んなることに就いては、職業人口構成中第一位を占めて居るものは農民であり、人

(註一)

口が大都市に集中して居らず其の大部分は田舎或は中小都市に存することに依つて知られるが、レスキユールはフランスの貯蓄力の最も重要な原因を此處に置いてゐる。彼れは貯蓄の敵は奢侈であり、奢侈は大都市に於て行はれる、田舎や中小都市に於ては奢侈は少く家賃や地代は安く生活費は少い、従つて貯蓄が出来ると言ふ。更に彼れは、農民が貯蓄をするためには彼等が其の土地より収入を得ることを必要とし、且又其の蓄積する資本が農村の開発に必要で無いことを要するのであるが、一九〇〇年頃即ち農業恐慌が終熄し葡萄栽培地の再興せられた當時に於て、フランスの貯蓄力及び處分の自由なる資金が増加した一原因は右の點に存するのであつて、之れは一八七〇年より一九一四年に至るフランスの經濟發達を研究する場合に、稍もすれば充分に強調せられない事實であると述べてゐる。(註二)

第四にフランスの富は約一世紀以前より有價證券の形で蓄積せられ、それより生ずる収入及び公債社債株式の償還金が亦フランスの貯蓄力を増加せしめてゐる。要するに貯蓄が貯蓄を生むことである。

以上がレスキユールの貯蓄力の原因に就いての説明であるが、前掲ロリオの言ふところと併せ考へるならば、大戦前のフランスの貯蓄力は、主として中産階級特に農業の發達と關聯して農民階級に存して居つたと確かに言ふことが出来る。

(註一) 一八六六年、一八九六年、一九〇六年、及び一九二六年の人口調査に依るフランスの職業人口の分布は次の如くである。⁽⁴⁾

	一八六六年	一八九六年	一九〇六年	一九二六年
農 業、漁 業、山林業	七、三三、〇〇〇	八、〇〇、七〇〇	八、八〇、〇〇〇	八、三九、〇〇〇
工 業	四、七五、〇〇〇	六、三三、〇〇〇	三、三三、〇〇〇	八、〇〇、〇〇〇
商 業	九、〇〇、〇〇〇	一、〇五、九〇〇	二、〇八、六〇〇	二、五八、〇〇〇
自由職業及び公務従事者	九、九〇、〇〇〇	一、〇八、五〇〇	一、三三、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇
僕 婢	一、二二、三〇〇	九、六、九〇〇	九、四、三〇〇	八、四、〇〇〇

(註)「フランスの農業は、一八八〇年より一九〇五年に至る間に、其の主要なる富を構成する二つの産物即ち小麦と葡萄酒との激烈なる恐慌に依つて、非常なる損害を受けた。(即ち)一八七三年より小麦の価格は殆んど止め度なく下落し、又一八八〇年より一八九〇年に至る間葡萄酒が葡萄栽培地を破壊した。(此の)小麦の價格下落と葡萄栽培地の破壊とに依つて、フランスの農業収入は減退した。他方に於て葡萄栽培地の復興に多くの資本が吸収せられた。之等の理由に彼つて充分自由なる資本は(當時)フランスに於て少かつたのである。然し一八九七年より小麦の価格は上り葡萄栽培地は再興せられ、葡萄酒の價格は騰貴した。而して爾來農業収入従つて又フランスの収入は増大し、それと共にフランスの貯蓄力は増大するに至つたのである。」⁽⁵⁾

尙、マルタンも右と大同小異のことを述べて、「フランスの有價證券の増加は農業の盛衰と相關聯すると言ひ得る」と述べてゐる。⁽⁶⁾

然し其の反面に於て、フランス人が貯蓄に依つて安泰なる生活を送ることに専心するの餘り、保守退嬰的とな

り、企業心の衰微、人口増加率の停滞或は減退を來すといふ缺點が存する。フランスの學者の中、此の缺點を指摘するものを擧げると、例へばマルタンが、「一國の完全なる經濟的發達は、之等二つの性向（貯蓄心と企業心）とが保持せられ満足され得るのでなければ、實現せない。然るに戰前に於ては、政治方面に於ても我が銀行制度の一般的狀態に於ても、貯蓄心が企業心よりも發達の可能性が多かつたことを認めなければならぬ。イギリス、ドイツに於ては、銀行は金利生活者よりも産業家を多く満足させる様に留意したに反して、フランスに於ては貯蓄に對して多數の機關を付與した。……先慮心（*prévoyance*）及び貯蓄心が企業心及び創造の精神を後退させた。又利己主義が斯かる性向を強めることに依つて、國民はより多く貯蓄を確實になし得る様に、子供を殖やすことを差控へる様になつた」と述べ、又コルソンが「萬人の意見ではフランスは貯蓄の嗜好の最も發達し、最も普及してゐる國の一つである。只我國では他の何れの處よりも小額の貯蓄は多くても、大資本家殊に中資本家は企業心が少い、従つて英・獨・米人はフランス人よりも節約でないが、其の資本の大膽なる使用に依つて、一世紀以前より富有となつてゐる。」⁽⁸⁾と言へるが如きは之れである。

大戰前に於けるフランス貯蓄の性格、貯蓄力の原因は上述の如くであり、又それに依つてフランス人の保守的なる性質、フランス經濟の比較的自給的なる性質をも推知することが出来る。然しフランスの貯蓄力は果して他の諸國に勝るものであるかは、容易に知る事を得ない。ジードは此の點に就て疑ひを抱き、前掲のフォン・ビュローの言葉を擧げたる後次の如く述べてゐる。

大戰前に於けるフランスの國民貯蓄及び投資

「統計は斯かる御世辭的なる意見を確證せない。最良の指標は、各國に於ける預金者の預金の平均額を採らずに、住民一人當りの預金の平均額を採ることである。フランス・フラン(一九二九年の)に換算したる其の數字は次の如くである。

デンマーク	三、九九〇	フランス	八二〇
北米合衆國	二、一〇〇	イタリー	八〇〇
イギリス	一、〇〇〇	ベルギー	四七八
ドイツ	八三七	スペイン	三八〇

然し、ジード自身も認めてゐるが如く、「各國の諸事情の相違、郵便貯金や貯蓄銀行の預金以外の諸種の投資方法、特に土地の買入、預金受入の一定限度等」を考慮に入れなければならぬから、右の如き數字のみに依つて各國の貯蓄力の大小を示す證據となし難いのである。只だジードが右の數字を擧げることによつて、「フランスが貯蓄國であるといふ評判は非常に誇張であり、フランスはもつと謙遜すべきである」と戒めてゐることは注意せねばならぬ。(9)

三 國民貯蓄の推算

一 國民の國民所得の中幾干が貯蓄せられ、幾干が諸方面の消費に向けられるか、精確に知り得るならば、其の利用價值は極めて大なるものとなり、例へば我國現下の問題たる國債の消化力、生産擴充資金の多寡、又消費節約の餘地或は限度等を精確に知ることが出来るであらうし、又租稅政策や景氣變動其他の研究上に於ける重要な

る資料となることは容易に想像せられる。然るに其の計算は非常に困難であり、資料の缺乏或は不充分のために、遺漏や重複の無い正確は容易に求め得られない。

フランスに於ても、銀行其他の預金額、保険料拂込額、有價證券發行額等の如き貯蓄の存在或は其の投資を示す若干の資料は存在して居ても、之等を適當に綜合取捨して國民貯蓄の多年に亘る推算を試みた者は少い様であつて、大戰前或は戦後の特定の時期に就いて國民貯蓄の概畧的なる推算を行ふか、或は國民財産及び國民所得の推算より國民貯蓄額を推測した程度のもものが存するに過ぎない。

大戰前のフランスに於ける年々の國民貯蓄に就ては、英國のペイシユは二億磅即ち當時の五十億法餘に見積り、ジードは「富有なる國民に於ては貯蓄は全體の所得の二割乃至三割の間で變化する様に思はれる。此の割合に從へばフランスの年々の貯蓄は全體の所得三百億乃至三百五十億法(金フラン)に對して四五十億法と見積ることが出来る」と言つてゐるが、推算の根據を示してゐないので、其の根據を比較的明瞭に知ることの出来るレスキユールに依れば、約四十億法と見積つてゐる。此の見積を如何にして出したかと言へば、ネーマルク、ルロア・ポリーユの如き此の方面の權威者の推算したるフランスの年々の個人貯蓄額約二十億法の上に、ネーマルクの推算した年々償還せられる債務額を十五億法と見て之れを加へ、更に株式會社の年々の利益積立金を數億法(註五)と見、右三者の合計を約四十億法としたものである。(註四)(註三)(註二)(註一)

従つて此の四十億法といふ金額は、年々の新貯蓄と見るべき個人貯蓄と法人貯蓄との合計の上に、舊貯蓄の投

資よりの解放と見るべき年々の償還債務額を加へたものであつて、レスキュールも言へるが如く、年々の處分自由なる資本であるが、彼れは又此の約四十億法を以て大戦前に於ける貯蓄の年々の發生額と見てゐるのである。(13)

(註三) ネーマルクは大戦前のフランスの貯蓄に就いて詳密なる研究をしたが、其の結果「フランスの貯蓄は概算十五億乃至二十億法有價證券に投資せられ或は保留せられる」とし、其の内譯を次の如く示してゐる。(14)

十五億法

約一億法乃至二億法

フランスに於て買取せられる、フランス及び外國の有價證券への投資年額
諸銀行の預金の年増加額にして翌年以後に於て結局投資せられるもの

一億五千萬法乃至二億二千五百萬法

大小貯蓄者の金庫或は毛絲の靴下中に不利用の儘保持せられる眞の保留貯蓄

合計 十七億五千萬法乃至十九億二千五百萬法

尚、ネーマルクは此の數字が少しも過大ではなく、寧ろ控え目であつて實際よりも少いと述べてゐる。

(註四)

ネーマルクの推算したる年々償還せられる債務額の内譯は次の如くである。(15)

一、各種の債券及び證書の年償還金

十億乃至十二億法

二、フランス及び外國證券の割増金

二二、五七九、三六九法

三、フランス年賦償還公債

四九、八二九、〇〇〇法

四、外國々債

二五〇、〇〇〇、〇〇〇法

五、無條約の外國證券の償還金

六、在外國證券の償還金

合計 十三億二千萬法乃至十五億二千二百四十萬八千三百六十九法

(註五) レスキュールは、フランスの株式會社は其の利益金を積立金として控除することが著しいから、之れを以て無視す

ることの出来ない貯蓄の源泉としてゐる。而して数億法といふ見積は、極めて粗雑なる仕方ではあるが、凡ての株式會社の年々の積立金を知り得ないがために、九大冶金工業會社の一九〇四年より一九〇八年迄の五ヶ年間の積立金の年平均額二千三百八十萬法より推測したものである。⁽¹⁶⁾

次に大戦前のフランスの國民所得——私人所得の總額——に就いては、コルソンが次の如き推算を發表してゐる。

(單位十億法)

	不動産及び有價證券		賃銀(現物及び貨幣)		企業及び獨立勞働收入		退職金及び終身年金		合計
	一八九九—一九〇一年	七、〇	一〇、五	八、一	〇、六	二六、二	一、〇	三六、一	
一九一三年	九、二	一四、七	一一、二	一、〇	三六、一				

然し彼れは之等の數字を餘り正確なるものと考へると却つて誤りであることを注意して、「確かに斷言し得ると信ずることは、戦前の私人所得の合計は三百二十億と四百億との間に含まれてゐる……」と述べてゐる。⁽¹⁷⁾

更にデュゲ・ド・ベルンヰヴィルの大戦後のフランス國民所得統計に依れば、一九一三年の私人所得の總額は次表の如く三百六十億法となつてゐる。(單位十億法)。⁽¹⁸⁾

	賃銀及俸給		資本收入		混合收入(資本及勞働)		恩給及合計	
	有價證券	建物	農業(地代ヲ含ム)	商工業(配當金ヲ含マス)	自由職業	退職金、四捨五入)	計	
一九一三	四、五	二、六	八、四	四、〇	〇、六	〇、五	三六	
一九一七	四、五	二、六	八、四	四、〇	〇、六	〇、五	三六	

大戦前に於けるフランスの國民貯蓄及び投資

右の如く一九一三年のフランス國民所得を約三百六十億法と見ることは、他の學者（フランソア・マルサル、テリー、セリグマン）に於ても大體一致してゐる點である。⁽¹⁹⁾又、ロンドン・エコノミストは一九一三年のフランス國民貯蓄を五十億法とし、それが國民所得の七分の一に當ると述べてゐるから、國民所得を三百五十億法と見てゐることになる。⁽²⁰⁾

以上の如く、フランスの大戦前の國民貯蓄及び國民所得に就いては、有力なる學者の研究に依つても粗大なる數字を擧げ得るに過ぎないのであり、且又各々の學者が同一なる推算の方法、材料に依つたものでもないから、國民貯蓄が國民所得に對して幾何の割合を占めてゐるかに就ても、勿論正確なることは判らないのであるが、國民所得を三百五十億或は三百六十億法として國民貯蓄を五十億法とすれば、後者は前者の一割四分餘或は弱に當り、國民貯蓄を四十億法とすれば、それは前者の一割一分餘に當ることになる。従つて大戦前のフランスの國民貯蓄は概畧乍ら國民所得に對して一割一分乃至一割四分位のものと言ふことが出来るであらう。（未完）

- (1) J. Lescaur, *L'Épargne en France*, 2^e éd., 1936, P. 45; G. Martin, *Les problèmes du crédit en France*, 1919, P. 26; Ch. Gide, *Cours d'économie politique*, 10^e éd., Tome II, 1931, P. 515 note; L. Delaney, *Le marché des valeurs mobilières en France*, 1923 P. 17 note. 豊崎善之助、佛蘭西の銀行及金融（大正五年）三一—四頁
PP. 520—521)
- (2) J. Lorient, *Une réforme de structure: la ruine de l'épargne française* (*Journal des économistes*, Nov-Déc., 1937, PP. 520—521)
- (3) J. Lescaur, *op. cit.* PP. 45—52
- (4) J. Lescaur, *Ibid.* P. 45 note.

- (5) J. Lescaure Ibid P. 51
- (6) G. Martin, op cit. P. 32
- (7) G. Martin, op. cit. PP. 28—29
- (8) C. Colson, Cours d'économie politique. Livre 3e, 1927, P. 431
- (9) Ch. Gide, op. cit. P. 515 note.
- (10) 經濟學之動向 經濟學 第四十號
- (11) Ch. Gide. op. cit. P. 515. note
- (12) J. Lescaure, op. cit. P. 95
- (13) J. Lescaure. op. cit. PP. 69—70
- (14) A. Neymarck, L'épargne française et son développement annuel.
(Journal de la Société de Statistique de Paris, 1906, PP. 233—234)
- (15) A. Neymarck. Les amortissements et remboursements dans le cours du siècle.
(Journal de la Société de Statistique de Paris, 1910, P. 220)
- (16) J. Lescaure op. cit. P. 70
- (17) G. Colson, op. cit. PP. 403—404
- (18) L. Dugé de Bernonville, Les revenus privés (Revue d'Economie Politique, mai-juin, 1937) (La France Economique annuaire pour 1936) P. 549
- (19) cf. H. G. Moulton and C. Lewis, The French Debt Problem, 1925, P. 424
- (20) The Economist (The National Income of France and The Burden of Taxation) March 15, 1924, P. 576